アメリカ合衆国とアフリカ系アメリカ人（2）

——アメリカ文明の限界：『ロス暴動』とキング牧師を結ぶもの——

The U. S. A. and Afro-Americans (2)

（1995年3月31日受理）

君　塚　淳　一
Junichi Kimizuka

Key words：階級暴動、貧困、人種

は　じ　め　に

1992年にロサンゼルスで起きたロドニー・キングの白人警官による殴打事件に端を発した、いわゆる『ロス暴動』は、『ニューズ・ウィーク』（1992年5月14日号）で、社会学者のジョエル・コトキンの論に代表されているような「人種暴動ではなく階級暴動である」という論調で、ジャーナリズムで語られた。それは「この暴動が、60年代のアフリカ系[1]への人種差別に対する怒りの爆発であった『長い暑い夏』と称されたニューヨークやシカゴ、そしてロサンゼルス・ワッツ地区での史上空前の暴動（65年）とは違う」という論を結局展開したのであった。つまり、その根拠とされている点とは①暴動に参加した者がアフリカ系に限られておらず、ヒスパニックそして中には白人もいたこと②彼らの不満の矛先は自分たちの失業状況であること③その犯罪・被害状況の多くが地域の店からの略奪であること④暴動参加者が「人種憎悪」というよりはお祭り騒ぎで参加した者も少なくなかったことなどである。

しかしこの『ロス暴動』に対する「階級暴動」という評価、つまり、60年代のものとは違うという評価は果たして正しいのであろうか。1つにはこれで「階級暴動」とすることで発端となった人種に関する殴打事件への関心が薄められる効果が逆にあると同時に、現代のアメリカに於いて未だに司法が差別を行うなどという恥を全世界へ知らしめてしまうことをいくらかでも抑制するための弁と考えざるを得ないのではないか。またこの暴動が根深いアメリカ南部に始まる人種差別問題の歴史や文学、そして60年代の公民権運動の時代から見てどのような解釈が可能だろうか。小論では以上のような点を考慮に入れて、過去から60年代にかけてのアメリカ南部における人種問題の視点

から「人種と階級」の問題を考察することにする。

I

南北戦争以前にアメリカ南部において確立されていた「奴隷制度」は、周知のとおりホワイトとカラードの図式を「主人と奴隷」そして「人間と家畜」という形にそのまま置き換えが可能であった。当然のこととして、奴隷は物同然に売買され、彼らは自分たちを買った主人の所有物であった。つまりそこにも確かに「主人と奴隷」という階級制度が成立しているのである。その点からして古くは1831年、未だリンカーンの「奴隷解放」以前に起きたあの有名なナット・ターナーの「黒人」奴隷の反乱も、「公民権」を獲得しつつあった60年代に都市で起きた数々の暴動も、全て言ってみれば「階級暴動」ではないのであろうか。(彼らアフリカ系が「非人間」という扱いであり、「階級」という規範はそこには存在してなかったということなら別だが)

更に、アメリカ南部のプランテーションに於けるかつてのアフリカ系の地位は、低賃金で搾取できうるプランターたちのための絶好の労働力であったことはいうまでもない。また、「奴隷」という階級を与えられた当時のアフリカ系アメリカ人たちには、このプランテーションの労働者としての身分以外には生活手段がない(南北戦争前において)となれば「階級」という関係が強調されるのはなおさらのことである。『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』(1964)で本田氏はプランテーションの一般的な規定を①「プランテーションとは、ひとつの資本主義的な型の農業組織であり(略)」(L.C.グレイ)②「プランテーションは、統一した指導と管理のもとに経営される大農場である。」(L.M.ハッカー)③「プランテーション制度は、自由労働の供給が欠如したところで、(略)」(U.B.フィリップス)などの例を出し[2]、この南部の経済構造は、これらの一般的な規定の語る「産業資本」の解釈ではないことを指摘している。それはつまり、「主人と奴隷」という階級関係により「労働力の商品化—純粋に経済的な関係」がそこに見て取れぬからである。

しかし歴史が語るように「リンカーンの奴隷解放宣言」後に於いて、今度は本来の意味での「資本主義的」な労働力としてアフリカ系アメリカ人たちは北部へと徐々に移動し始める。しかし、自由に見えた北部もたいていのアフリカ系アメリカ人にとっては、「主人と奴隷」という階級関係が「資本家と労働者」という置き換えが成されただけのことであると、いずれ彼らも気付くことになる。つまり奴隷制時代には「主人と奴隷」という主従関係の中で、解放後はたとえそれが北部であっても「資本主義のヒーラルキーの労働力の底辺」で、彼らは苦しめられることになる。アフリカ系アメリカ人作家の代表的存在 Richard Wright (1905-60) は彼の南部での生活を描いた伝記的小説である *Black Boy* (1945) に続編で、北部移住後の生活を記した *American Hunger* (1944) の冒頭で既に

> My first glimpse of the flat black streaches of Chicago depressed and dismayed me, mocked all my fantasies. Chicago seemed an unreal city whose mythical houses were built of slabs of black coal wreathed in palls of gray smoke, houses whose foundations were sinking slowly into the dark praire[3].

と北部への絶望感を表している。また、彼の死後出版となった *Lawd Today*（1963）で登場する南部出身で北部で労働者となったプロタゴニストの Jake は、「黒人ゆえに資本主義の底辺に置かれ、身動きの取れぬ自分の状況」に不満を感じ、妻には八つ当たりから暴力をふるい、持ち金全てはたいてギャンブルに興じるというように、常に刹那的に生きているよう描かれている。資本主義社会内での階級の底辺におけるこの彼らの状況は、時代を超えて変わることはないのだろうか『病める合衆国―現代アメリカの貧困化』（1993）に於いて小谷氏は人種別貧困率や失業率では未だに白人に対し黒人が圧倒的に高いことを指摘した上で、

> 1992年の黒人暴動は、一黒人青年にたいする警察官の暴力事件に端を発するが、大統領選挙にも取り上げられることもなく、人種差別にたいする不満と憤激は大都市の多くでくすぶりつづけているといわれている[4]。

とまとめているが、それが事実であろう。

さて、それでは60年代に於ける都市で起きた人種暴動をこの『ロス暴動』と比較すると大きな違いはあったのだろうか。当時のニューヨークで、ユダヤ人経営の店が焼き討ちにあったり、略奪されたことはよく知られていることだ。それはアフリカ系アメリカ人作家である James Baldwin（1924-87）が *Notes of a Native Son*（1955）の中で以下のように述べている。

> Jews in Harlem are small tradesmen, rent collectors, real estate agents, and pawnbrokers; they operate in accordance with American business traditon of exploiting Negroes, and they are therefore identified with oppression and are hated for it[5].

また、MalcomX も「ユダヤ人はどこの黒人のゲットーでもおもな仕事を手中にし、そのオーナーは黒人社会の金を毎晩、家に持って帰る」[6]と自伝の中で語っていることからも、当時彼らが狙われていたことは否定できない。そのターゲットが今回の『ロス暴動』では韓国人経営の店となったのも同じ理由であろう。貧困と失業という現状況は自分たちへの人種的差別に原因があると意識し、アフリカ系とヒスパニック系がロドニー・キング事件への裁判の結果も政府のその差別感の表れであ

るとして、アメリカ政府への憤激を、暴動という形で表現したとしてもおかしくはない。

Ⅱ

更にホルヘ・G・カスタニェダ（メキシコ国立自治大学政治学教授）は『ニューズ・ウイーク』（1992年6月25日号）の「中南米系アメリカ人はなぜ暴動に加わったのか」という論文でその理由を、彼らは祖国で散々「貧困と不平等」に苦しめられてきて、更に夢を抱いて移民してきたアメリカにまで裏切られたためである、としている。彼らの意識の中では、祖国での「貧困と不平等」とアメリカのそれとは異なるもの、つまりアメリカでは同様なことはあってもチャンスは必ずあり、能力さえあればアメリカン・ドリームは達成できうると彼らは信じていたのである。だが、結局のところ、アメリカは自分たちを労働力として招き寄せているだけであることがわかり、それゆえ彼らは暴動へ加わったのであると彼は結論づけている。まさにこれは奴隷解放後に南部から北部へ移住した当時のアフリカ系と同じ状況である。

このカスタニェダ氏の論も前述のコトキン氏のものも、『ロス暴動』が「階級暴動（闘争）」であることを強調する。しかし、この階級を形成している裏には「人種問題」が存在することは当然忘れてはならないことだ。常に「資本主義のヒーラルキー」の底辺に低賃金の労働力として置かれ、不況時には失業の憂き目に会う彼らが、ロドニー・キングに対する判決で確信したものとは、言うまでもなく、「普段は表出しないアメリカ政府の人種差別感」であったのだ。

60年代の公民権運動で膿を散々出し全て解決済みであった筈のアメリカの人種問題であったが、深南部どころかロサンゼルスで、それも警官が人種差別行動を行ったことで、政府も対応によほど困ったに違いない。何としてでもこの失策はつじつまを合わせて面目を保たねばならぬと、弁護側は法廷をロサンゼルスから白人中流階級が住むシミバレーへと移し、結果としてこの「警官の暴行事件」の疑いをはらそうとしたことは周知のことだろう。このアメリカ政府の人種差別行動の一面を覗かせてしまった問題に、彼らは怒り、暴動に走ったことは言うまでもないことだ。前章で既に述べたように、結局アメリカはかつての南部における人種差別への精神構造が、不況という状況における国家政策に至って、特に表出してしまったと言えよう。Richard Wright が描いた *Lawd Today* の世界は60年代の公民権運動を経ても同じ状況であり、ロスに於いては Jake に代表されるアフリカ系にヒスパニックが加わっただけで、その頃と何も変わっていないのである。

さて、この状況で白人の失業者、貧困層をどうとらえておくべきなのだろうか。北部ではなく、南部のいわゆるプア・ホワイト（貧困白人）をまずここで挙げてみる必要があるだろう。アメリカ南部におけるプア・ホワイトについては Earskin Caldwell（1903-）が描いた *Tabacco Road*（1932）はあまりにも有名であるが、貧困の差から言えば、当時のアフリカ系とたいして変わらぬ

低所得者である貧農白人は南部には多く存在していたし、現在に於いても農家に限らず低所得で苦しむ南部貧困白人は存在している。彼らの「自身の貧困状況への不満」と「南北戦争敗北の劣等意識」そして奴隷解放後に於いても変わりようのない「アフリカ系への人種差別意識」があの悪名高き K.K.K. 団（キュー・クラックス・クラン）を生み出したことも皆の知るところであろう。

南部に於いて「貧困」という資本主義のスケールで並べられるとアフリカ系と同じ位置に置かれてしまうプア・ホワイトにとって、唯一自分たちが彼らと一線を引けるものと言えば、カラードかホワイトかという人種の違いであったことは明らかであった。そしてその一線を崩すことになった「奴隷解放宣言」直後に、この K.K.K. 団がプア・ホワイトによって結成されたのはそういう点で納得が行く。言うまでもなく彼らはアフリカ系に「白人と同等に」振る舞うことをリンチによって恐れさせ、「解放」前の状況を維持しようとしたのである。皮肉にも92年の大統領選での候補者の一人に名を挙げた中には元 K.K.K. のリーダーであったデビッド・デュークがおり、彼は南部のプア・ホワイトの票を集めていたのも未だ記憶に新しい。南部という「奴隷制」の歴史が根強い土地ではこのプア・ホワイトの発想も未だに続いているのだろうが、他の地域では状況は異なる。レーガン政権における福祉に対する大幅なカットや金持ちに対する税金の引き下げが、白人社会の中でも貧困者と金持ちの差を広げることになり、白人の中にも地域を問わず依然としてプア・ホワイトを生み出している。既述したとおり、資本主義のヒーラルキーで底辺に置かれる貧困層に、『ロス暴動』に参加したアフリカ系とヒスパニックに便乗してこのプア・ホワイトがいてもおかしくない。人種の一線が外されていれば、貧困層としては同等なのであるから。

Ⅲ

さてこの貧困層の問題は、公民権運動の真っ直中であるアメリカの60年代においても、「人種暴動」と関わってその指導者たちにとっては大きな課題であったことを忘れてはならない。当時、バス乗車ボイコット運動を始めとして南部を中心に公民権運動を展開していたマーチン・ルーサー・キング牧師が北部から非難を受けていたのは、彼の方法は北部という都会で貧困に苦しむアフリカ系の問題解決には何の効果も上がらないことであった。彼らは常に低賃金で搾取され、景気が下降すると決まって首を切られるのは彼らからであった。当然、当時では国の財政はヴェトナム戦争へと回され、国内の貧困対策は後回しであった。そんな中、キングは結局、ヴェトナム戦争反対の態度を明確にした後、1968年には貧しき者を全て巻き込む運動である「貧者のための行進」を宣言する。キングは『良心のトランペット』（1968）において

つまり（政府の）貧困対策の計画には、黒人白人双方を含んだ貧困者にたいして将来の確

実な約束があったかのごとく思えたものでした。幾度か試みがなされ希望と新しい発展がみられたのです。しかしその後、ベトナム派兵の増強がなされ、まるで戦争に心を狂わせた社会が無益に政治的玩具をもてあそぶかのごとく、貧困対策への計画はつぶされ、骨抜きにされゆくのをみせつけられることになったのです[7]。

と当時の状況を説明している。政府による貧困対策への無視はアフリカ系に限らず、人種を越えた貧しき者たちの不満を更に増大させた。1960年代のアメリカの貧者の感情も92年の『ロス暴動』のそれも時代を越えて変わりはない。その時、30余年の歳月はまるでなかったかのように感じられた。つまり90年代のアメリカにおいてもロドニー・キングに対する警官の殴打事件のような公民権運動以前と変わらぬ人種感情、そしてその事件を巡っての司法当局の「白人による法」(かつては白人が黒人を殺害しても無罪になった)という人種差別的行動もアメリカでは未だ存在していることを誰もが自分の目で確認してしまったのだ。まさにマーチン・ルーサー・キング牧師が、最後の結論に達して行動に出た68年の問題、つまり「人種問題と貧者」の問題はアメリカでは未だ解決されず、くすぶり続けているのである。

シェルビー・スティールは *The Content of Our Character—A New Vision of Race in America* (1990) において黒人中産階級の視点から、「人種を持ち出せば、自分の努力不足や能力不足をごまかす言い訳ができる」とアファーマティヴ・アクションを始め、現在のアフリカ系をとりまく人種問題を取り上げることを否定する。彼の理論は中産階級に属した「ブラック・ブルジョアジー」の発言ではある。しかしその発想を逆に更に進めて行けば政府の貧困政策の発想にも繋がる。つまり「貧困層にかつての劣等人種というレッテルのイメージをはりやすい人種が多ければ多いほど、それで彼らが貧困層に甘んじている言い訳が政府にはつく」のである。そして非貧困層にはその神話を思い込ませれば、問題は全て解決することになる。しかし、これからのアメリカ政府が抱える問題は年々、増加しつつあるプア・ホワイトの数である。そうなると当然、この「人種の言い訳」がつかなくなるからである。

Ⅳ

今この社会の黒人と貧困層に火の手があがっているのです。彼らは社会学者がそう呼んでいるように、恐るべき経済の不正によって「下層階級」としてそこに閉じ込められているという悲劇的諸条件のなかに住んでいるのですから[8]。

上記の引用は92年の『ロス暴動』に対してのものでは決してない。前章で述べたようにキング牧師

が悩んだ揚げ句、ヴェトナム反戦表明と北部の貧者を救うべきという結論にいたった見解である。この彼の「貧者のための行進」への決意を裏付けるような1968年の言が、92年の『ロス暴動』にそのままあてはまるのは、アメリカが人種問題においても貧困政策においても、やはり全くと言ってよいほど進歩していないということなのだろうか。

既に述べたように、かつての南部に於ける奴隷制度下での、労働力としてのアフリカ系は、北部では資本主義のヒーラルキーの構図の底辺を埋める存在として、入れ替えがされただけであった。自由と平等のアメリカも、資本主義という旗の元に「アメリカン・ドリーム」を夢見て北部へ移動したアフリカ系や、移民してきたヒスパニックにとっても、油断しているといつのまにか「閉じ込められてしまう悲劇的諸条件；下層階級」が待っている場にすぎない。キング牧師が公民権運動を経て、生命を賭けて決定した「貧者のための行進」は当然、アメリカ資本主義を敵にまわしかねない行動であったことは言うまでもないことであろう。しかし、彼にとってそれは、南部でのジム・クロウ法（人種隔離政策）の撤廃以上に困難な問題であったことは『ロス暴動』をとおして改めて痛感するのである。この問題は絶対に解決不可能なのだろうか。この「貧困と人種の問題」（貧困を人種的劣等に結び付けて政策に手を抜き、またその一方で彼らをヒーラルキーの底辺に置いておくこと）は、皮肉なことにプア・ホワイトが増加してゆくことで、もしかすると今後、解消してゆくかもしれない。

Notes

1 以降「時代」や「原文」によって表記を『黒人』,『アフリカ系アメリカ人』と使い分けることにする.

2 本田創造,『アメリカ南部奴隷社会の経済構造』（東京：岩波書店，1964），pp. 129-30.

3 Richard Wright, *American Hunger* (New York: Harper & Row, Publishers, 1979), p. 1.

4 小谷義次,『病める合衆国―現代アメリカの貧困化』（東京：新日本出版社，1993），pp. 131-2.

5 James Baldwin, *Notes of A Native Son* (Massachusetts: Beacon Press, 1979), p 56.

6 Malcolm X, The Autobiography of Malcolm X (London: Penguin books, 1968), p. 390.

7 Martin Luther King Jr., *The Trumpet of Conscience* (New York: Harper & Row, Publishers, 1968), 翻訳はみすず書房『良心のトランペット』(1993) 中島和子訳を使わせていただいた. p. 31.

8 ibid., p. 68.

Bibliography

Baldwin, James, *Notes of A Native Son*. Massachusetts: Beacon Press, 1979.

Hannerz, Ulf, *Soulside-Inquires into Ghetto Culture and Community*. New York: Columbia University Press, 1969.

Higginbotham, Jr., A. Leon, *In the Matter of Color*. New York: Oxford University Press, 1978.

King Jr., Martin Luther, *The Trumpet of Conscience*. Harper & Row, Publishers, 1968.

Milbauer, Barbara, *Riots-Problems of American Society*. New York: Washington Square Press, 1970.

Steele, Shelby, *The Content of Our Character—A New Vision of Race in America*. New York: Harper & Row, Publishers, 1990.

Wright, Richard, *American Hunger*. New York: Harper & Row, Publishers, 1979.